

講演「地震と江戸城 - 石垣は語る - 」

野 中 和 夫

1 地震と江戸城

江戸時代、江戸内で石垣が崩壊するほどの大地震は、寛永 5 年(1628)7 月 11 日、寛永 7 年(1630)6 月 23 日、正保 4 年(1647)5 月 13 日、慶安 2 年(1649) 6 月 20 日、元禄 16 年(1703)11 月 23 日、宝永 3 年(1706)9 月 15 日、安政 2 年(1855)10 月 2 日の 7 回が記録されている。

この内、最大級の被害をもたらした一つに元禄 16 年の大地震がある。震源地は、房総半島南端沖合約 25 km で、推定マグニチュード 8.2 という巨大なものであり、震源地に近い安房・上総や三浦半島では震度 7 の強い揺れが襲ったという。この地震では、家屋倒壊や土砂の崩落もとより巨大津波も発生し、人的被害も甚大で、江戸を除く安房・上総・相模・伊豆の地域だけでも 7,000 名以上の犠牲者が生じている。

一方、江戸では「甘露叢」や「元禄宝永珍語」などによって地震の揺れの大きさや、家屋の倒壊、石垣の崩落等々が描写され、死者も相当数にのぼったことがわかる。しかし、詳細な被害状況やその後の復興という点では、これまでさほど明らかにされていなかった。

2 江戸城石垣の復興記録

都立中央図書館所蔵「江戸城造営関係資料(甲良家伝来)」の中に、江戸城石垣を通しての詳細な被害状況とその後の復興を知る貴重な史資料がある。「石垣築直シ銘々場所帳」(東 6158-8)と「御城内外御作事御手伝方丁場絵図」(東 6158-7)、「御城内向絵図」(東 6158-6)である。

「石垣築直シ銘々場所帳」には、石垣普請を命じられた松平右衛門督をはじめとする 22 名の大名(これに、松平大膳大夫の家臣、吉川勝之助が加わる)が名を連ね、主要な担当丁場名を記した後、各大名丁場における崩壊したり孕んだりした場所、復興した石垣の間数と坪数、足石の数量等々が詳細に記述されている(表 1)。掲載の順位は、復興の工程とも関連し、本丸・西之丸に始まり、外郭にいくに従って後になる傾向にある。4 期にわたる復興は、地震直後の元禄 16 年 11 月 28 日に先ず 7 家が、最後は宝永元年(1704)5 月 29 日に 7 家が命じられ、同年 11 月朔日に全てが竣工している。ちなみに、被害の大きいのは、「御城内向絵図」とも照合すると、本城の三之丸喰違門、大手三之門から二之丸、平川口から北桔橋門・竹橋門にかけてと西之丸といえる。本丸と西之丸の殿舎に関する被害記録はないが、石垣に関しては中枢部を直撃していることがわかる。

この史料には、足石総数として 2 万本を要し、その中の凡そ 3,000 本余を幕府の石置場及び急場しのぎとして溜池落口と半蔵門北側の多門石垣を崩し用立てたとあり、そこには石の移動に関する情報も明記されている。特に注目されるのは、「上梅林」・「梅林坂」より 4 家の大名丁場で総数 964 本を請取るという点である。ここは、本丸北東端から二之丸北西端にあたり、千本近くの隅石や平築石を貯えておくようなスペースは到底考えられない。「御城内向絵図」に、下梅林門の左手、天神濠に面して「新口」・「舟はし」の付箋が見られるのは、復興にあたり、廢材の搬出と資材の搬入を船でここまで行き、石材に関しては本所石置場から運搬した後、分配したと考えられるのである。隅石・平築石という石垣用材のほかに、「玄蕃石」「小田原石」「青石」

などの石材ブランド名が見られることも看過できない。

「御城内外御作事御手伝方丁場絵図」、「御城内向絵図」の2枚の絵図は、赤い付箋が剥がれている箇所もあるが、石垣復旧を担当した大名丁場を明示している。とりわけ後者は、本城と西之丸の限定した範囲であるが、石垣が崩壊したり孕んだりした範囲の平面を朱引きで示し、それが「石垣築直シ銘々場所帳」とも一致することは特記に値する。

3点の史資料を裏付ける金石文が検出されている。それは、大手三之門・中之門・蓮池門・内桜田門と汐見坂・梅林坂間の石垣で、一例をあげると、中之門の角石裏面には、「寶永元年甲申四月日 / 因幡伯耆兩國主 / 松平右衛門督吉明築之」と彫られている。

3 毛利家の助役と調達した資材、経費

助役普請を命じられた萩の毛利家(松平大膳大夫)は、西之丸を担当し、二重櫓・渡櫓・多門・大番所等々の建て直しや修復を行っている(表2)。これには、石材だけでなく木材、唐竹・石灰・布苔・谷土・大阪土瓦などの資材が含まれていることから、石垣だけではなく、上屋も担当していることがわかる。これには、人足約48万人(幕府への届出には約29万人)、費用が約3,400両、米約1,200石を要しており、相当な負担であったことが理解される。

軽視されがちであるが、役船2,877艘という数字も重要である。毛利家は、幕府から廃材置場として本所に3,000坪の用地を借受けている。すなわち、廃材の処理や資材の搬入に船を用いているのである。ちなみに、石揚場は龍之口と数寄屋橋際の二箇所が記録されている。

船は、城内を頻繁に往来する。安全性を図るには、御印が必要である。古くは、下田愛子氏所蔵「石曳図屏風」の本船積みの場合に、大名の家紋と日之丸の二種類の旗が描かれている。伊豆稲取在住の上嶋梅子氏は、江戸時代後期から幕末にかけて公儀御用の船に掲げた三種の旗を所蔵されている。おそらく役船には同様のものが掲げられたであろう。

4 尾張家にみる石丁場の確保

徳川林政史研究所所蔵「駿州 豆州 相州 御石場絵図」と同・差出證文帳は、尾張家が幕末まで石丁場を確保していたことを物語っている。絵図は、元禄年間頃に描かれたと考えられ、そこには、「稲葉能登守殿丁場」・「松平大膳大夫殿丁場の由」の文字も見える。咄嗟の要求に応じるために、諸大名は石丁場を確保しておいたのである。

しかし、尾張家の場合、石材の数量は、18世紀以降、自然災害によるわずかな減少はあるものの、それ以外の変化はない。公儀の命は下されなかったのである。稲葉・毛利の両家が、元禄大地震の復興のために、相模・伊豆の石丁場から石材を運搬したかは不明である。しかし、現地の被害を考慮すると、その可能性は低いといえる。

5 おわりに

本講演を基礎に、より詳細な内容を「元禄大地震と江戸城 - 被害と復興の記録より - 」として『千葉経済大学学芸員課程紀要』第13号(平成20年3月刊行予定)で報告することになっている。

内藤能登守義孝	酒井靱負佐忠園	小出伊勢守英利	松平采女正定基	有馬大吉良純	永井日向守直達	松平周防守康官 <small>(松井)</small>	六郷伊賀守政晴	毛利周防守高慶	秋月長門守種政	黒田伊勢守長清	伊東大和守祐實	鍋嶋摂津守直之	松平兵部大輔昌親	上杉民部大輔吉憲	立花飛騨守宗尚	加藤遠江守泰恒	稻葉能登守知通	戸澤上総介正誠	丹波左京大夫秀延	吉川勝之助広達	松平大膳大夫義廣 <small>(毛利)</small>	松平右衛門督吉泰 <small>(池田)</small>	助役大名
陸奥	若狭	丹波	伊予	越前	摂津	石見	出羽	豊後	日向	筑前	日向	肥前	越前	出羽	筑後	伊予	豊後	出羽	陸奥		長門	因幡	国
平	小浜	園部	今治	丸岡	高槻	浜田	本庄	佐伯	高鍋	直方	飫肥	蓮池	福井	米沢	柳河	大洲	臼杵	新庄	二本松	右衛門	萩	鳥取	藩
四	一〇・三	二・八	三・五	五	三・六	四・八	二	二	二・七	五	五・一	五・二	四五	一五	一〇・九	五	五	六・八	一〇		三二・四	二八	石高(万)
幸橋門方・溜池落口	牛込・市ヶ谷・四ツ谷門方	浅草橋門方	虎之門方	赤坂門方	小石川門方	筋違橋方	田安門南御堀端	半蔵門北御堀端	半蔵門方	外桜田・坂下・日比谷門方	北桔梗門方、二十三間多門、七十 五門多門	竹橋・神田橋方	二之丸銅門、上梅林門方、汐見坂 辺	田安・清水門方	蓮池・内桜田門方、馬場先、日比 谷辺	吉ッ橋・雉子橋門方、同所御堀端 辺	呉服橋・数寄屋橋・山下門・銭瓶 橋・道三橋・龍之口辺	常盤橋・神田橋門方、吉ッ橋南堀 端	下梅林平川口、帶郭、紅葉山下、 西桔梗両門方	吹上御門外辺、外桜田辺	西之丸(大手・玄關前・山里・吹 上)・半蔵門南堀端、馬場先南堀端	本丸(喰違・大手・内大手・中之 門・玄關前門)	普請場所
二三八坪七合余	九〇〇坪余	五六八坪三合余	一六八坪九合余	一七五坪余	二八二坪余	二八六坪六合	六四一坪九合余 (四五二坪築直)	四九三坪余	三五九坪余	四六五坪五合	四四三坪	六七〇坪余	六三五坪	一、三二八坪一合余	五三〇坪	七三三坪四合	六八六坪五合	九九一坪余	一、三三七坪余	五〇四坪	一、九八〇坪余	八七八坪六合	坪数

(表1) 元禄十六年大地震石垣復旧一覽(甲良家資料『石垣築直シ銘々場所帳』より)

(表2) 震災復旧に要した毛利家の資料

品目	数量・他
材木	八六八本 〔槻丸太・松丸太・檜 ・完コマ・楫角〕
同・材木	三、五二八念(杉丸太)
掛塚榑木	二八、二九五挺
唐竹	六四、六五〇本
石	〔内、二八、九七四本拝借足代〕 二、三七五本
割栗石	〔但、隅石・平築石・岩岐石〕 〔背石・小田原石・玄碁石〕
木目石	九三坪九合
付芝	三二坪
大坂土瓦	四〇六坪
摺繩	二二三、五一六枚
石灰	六九六束
布苅	三六四石
同・布苅	二六二貫七六〇目
おり油	一五貫三百目 (但、松平右衛門督殿場所を請取)
豊古床	九斗
空俵	百登
谷土	六、六八五俵
砂	一七七坪
役船	二二坪
	二、八七七艘